アクティブラーニング型授業によるジェネリックスキル向上に関する一考察

A Study on Generic Work Skills in Active Learning

上岡　史郎
（Shiro KAMIOKA）

キーワード：能動的学習、汎用的能力、コンピテンシー
Key Words：Active learning , Generic work skills , competency

Ⅰ.はじめに

近年、座学を中心とした授業スタイルではなくアクティブラーニングといった学生自身が主体的に学んでいく授業スタイルが注目されている。その背景には、これからの時代に必要な能力が「知識の習得」によって得られるものから「主体性、応用力の修得」によって得られるものにシフトしているからである。アクティブラーニングは学修者が能動的に学修することにより、社会的能力や教養、経験を含めた様々な能力を育成することができるものである。

本学ビジネス社会学科では、マーケティングビジネスフィールドの専門教育科目である「店づくり実習Ⅰ・Ⅱ」でアクティブラーニングを中心とした授業を行っている[1)]。具体的には、グループワークによる店舗リサーチやフリーマーケットの企画運営、チャレンジショップへの出店などを行う。平成29年度には「店づくり実習Ⅰ」の授業で西武信用金庫の地域産業応援資金を活用したアクティブラーニングを行った[2)]。また平成30年度は「店づくり実習Ⅱ」の授業で、企業や団体とより積極的にコラボレーションしたアクティブラーニングを行っている。

本研究では、短期大学部の学生がアクティブラーニングを反復して行うことにより一般学生との間でジェネリックスキルにどのくらいの差異が表れるかを検証する。

Ⅱ.アクティブラーニング

1．アクティブラーニングの定義

はじめにアクティブラーニングの定義を明確にする。文部科学省ではアクティブラーニングについて「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」または、「学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る学習法」と定義づけている[3)]。具体的には、発見学習や問題解決学習、体験学習、調査学習などともいわれ、教室

かみおかしろう：目白大学短期大学部ビジネス社会学科

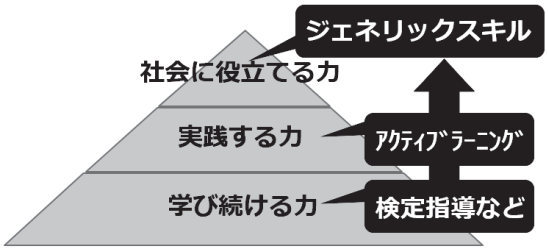
内でグループディスカッションを行うことやディベート、グループワークを行うこともアクティブラーニングの一つとされている。これらのことからもアクティブラーニングとは、参加者を中心とした学習であることがわかる。現代社会は新しい情報や技術が次々と生まれ、価値観も多様化している。アクティブラーニングを導入することで、新しい物事や他者の意見を積極的に取り入れる能力、他者と協力しながら問題解決する能力を修得していくことが求められているのである。

２．本学におけるアクティブラーニング

（1）本学が修得を目指す３つの力

本学では、「学び続ける力」、「実践する力」、「社会に役立てる力」という３つの力の修得を目指している[4)]。「学び続ける力」は、日頃の授業と合わせて検定試験合格や資格取得によって、小さな成功体験を積み重ねることで、学習への自信をつけさせ、継続的な学びの習慣を醸成させている。「学び続ける力」が修得できた段階で「実践する力」の修得段階に入る。この「実践する力」の段階でアクティブラーニングを活用する。座学を中心とした「学び続ける力」の段階で知識的な部分を確実に修得させ、そこで得た知識を「実践する力」の段階で応用力を発揮しながらアクティブラーニングを行っていく。また、アクティブラーニングを行っていく中で、不足する知識やスキルに気づき、その修得の必要性を感じて学修することにより「学び続ける力」をより強いものにすることができる。そして、「実践する力」の次の段階が「社会に役立てる力」の段階となる。ここではジェネリックスキルの修得の段階である。ジェネリックスキルは汎用的な能力ともいわれ、社会のさまざまな場面において適用できる能力となっている。基礎的な知識やスキルを「学び続ける力」の段階で修得し、アクティブラーニングによって「実践する力」を修得する。そこで不足する能力に気づき、また「学び続ける力」の段階に戻っていく。この２つの力を繰り返し修得することで、社会のさまざまな場面において適用できるジェネリックスキルを育成していくことができるのである。

本研究では、日頃の授業や検定試験合格、資格取得によって「学び続ける力」をつけた学生



出所）本学入学案内を著者が加工

図１　本学が修得を目指す３つの力

が、「実践する力」を修得するためにアクティブラーニングを行い、結果「社会に役立てる力」であるジェネリックスキルを修得できているのかを客観的、主観的な測定を行うことで検証していく。

（2）平成29年度におけるアクティブラーニング

平成29年度に行ったアクティブラーニングは、西武信用金庫の地域産業応援資金を活用したものである。本学ビジネス社会学科の１年生が地元にある梅の名所梅照院（新井薬師）をイメージした「ブルーベリーぱん」の販売促進企画を行い、地元商店街のチャレンジショップで販売した[5)]。学生は、半年間の授業の中で、梅照院周辺の商店街をリサーチし、どのような年代層の住民が多く居住しているのか、梅照院のイメージ、競合店の品ぞろえや価格、地元住民のニーズなどをグループに分かれて詳しくリサーチした。その結果から、梅照院は梅の名所であると同時に眼病治癒にご利益があることが分かり、商品は眼に良いブルーベリーを練りこんだ「ブルーベリーぱん」に決定し、販売することとした[6)]。「ブルーベリーぱん」のレシピ開発は本学製菓学科の教員が行い、そのレシピにもとづいて地元の洋菓子店であるロイスダールが商品を大量生産している[7)]。学生は、自分たちのリサーチ結果を参考にしながら、チームに分かれて、商品のネーミングやパッケージデザインの決定、オリジナルキャラクターやリーフレット、店舗レイアウト、広告宣伝などを考えた。

出所）店づくり実習Ⅱの授業内で作成

図2　ブルーベリーぱん　　図3　ラベル　　図4　パッケージ　　図5　キャラクター

（3）平成30年度におけるアクティブラーニング

平成30年度は、平成29年度と同様に、実習場所を薬師あいロード商店街の中にあるチャレンジショップとし、前回のアクティブラーニングを上回る活動をすることを目標に行うこととなった。学生は、前回「店づくり実習Ⅰ」を履修した学生が引き続き「店づくり実習Ⅱ」を履修し活動に参加している。今回は、梅照院が眼病治癒にご利益があることと、目に良いブルーベリーの産地であるフィンランドを結びつけて、フィンエアーの協賛とフィンランド政府観光局の協力のもとにフィンランドカフェの運営を行った[8)]。販売するのは、前回開発した「ブルーベリーぱん」とフィンランドの伝統的菓子「ムスティッカクッコ」である。カフェ店内では、フィンエアーから提供されたフィンエアーの販売促進グッズをディスプレイし、来店され

た方に対してフィンエアーから提供された絵葉書のプレゼントや、フィンランド政府観光局が制作した映像を店内に投影する活動を行った。

前回の活動では、学生自身が企画した商品を販売する活動が主なものだったため、洋菓子専門店のロイスダール以外は、企業との関わりがなかった。しかし、今回は、フィンエアーをはじめ、フィンランド政府観光局やフィンランドグッズ専門店、保健所などさまざま企業や機関と交渉することが必要であった。今回のアクティブラーニングでは、学生が企業との関わりのなかでジェネリックスキルをどれだけ向上させることができるかを検証することを目的とした。

出所）店づくり実習Ⅱの授業内で作成

図６　企業でのプレゼン　　図７　企業とのコラボ商品　　図８　店内ディスプレイ

Ⅲ.ジェネリックスキル

１．ジェネリックスキルの定義

ここでジェネリックスキルについて定義づけを行う。

ジェネリックスキルについて、内閣府では「人間力」、経済産業省では「社会人基礎力」、中央教育審議会では「学士力」、文部科学省では「就業力」とさまざまなところで定義づけがされている。ジェネリックスキルを日本語に置き換えると「汎用的能力」となる。中央教育審議会では、この汎用的能力を「さまざまな領域（学問、市民生活、職業）において適用できる技能、移転できる技能」としている。つまりジェネリックスキルとは、市民生活を送る上や、仕事をしていく上で必要となる汎用的能力ということができる。

２．ジェネリックスキル修得の必要性

（１）求められる背景

ジェネリックスキルが求められる背景として、川嶋太津夫（2011）は社会が知識基盤社会に移行したことを挙げている[9)]。知識基盤社会とは、変化が激しく、常に新しい未知の課題に試行錯誤しながらも対応することが求められる社会をいう。つまり、知識基盤社会では、知識の多さではなく、学んだ知識を生かして、新しい価値を創造する能力が求められているのである。そのためには、創造的思考力や問題解決力、分析力、協働力、リーダーシップなどの修得

が必要となってくる。このような能力がまさに汎用的能力に当たる。また、新卒者の離職率について、以前から「七五三」という言葉がある。それは入社 3 年以内に離職する割合が、中卒者は 7 割、高卒者は 5 割、大卒者は 3 割になるという意味である。大卒者の 3 分の 1 が 3 年以内に離職するという状況からも、生涯のうちで何回かは転職する現状であることを踏まえ、さまざまな職場でも適応できるジェネリックスキルの必要性は高まっていることがわかる。

（2）教育界と産業界の意識の隔たり

日本経済団体連合会による「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート（2011）」によると、「大学生の採用にあたって重視する素質・態度・能力」について、大学生の採用に際して、「非常に重視する」との回答が多かったのは「主体性」（5点満点で4.6点）、「コミュニケーション能力」（4.5点）、「実行力」（4.5点）、「チームワーク・協調性」（4.4点）となった。一方、「情報リテラシー」（3.3点）、「一般教養」（3.2点）、「外国語能力」（3.1点）、「専門資格」（2.6点）は低い数値となっている。また、最近の大学生に不足していると思われる素質・態度に関しては「主体性」を挙げる回答が最も多く（523社）、「職業観」（361社）、「実行力」（322社）が続いている。

これらのことからも、産業界側が学生に求めている能力は、専門的能力よりも汎用的能力であるジェネリックスキルを求めていることがわかる。また、このアンケート調査の中で、大学に取り組みを強化して欲しいと思うことについての質問項目があるが、「教育方法の改善（双方向型、学生参加型、体験活動を含む多様な授業の実施等）」を挙げる回答が最も多く（440社）なっている[10)]。このように、産業界では、今までの一方通行型の座学による知識修得型教育ではなく、修得した知識をどのように活用していくかという知識基盤型教育を教育界に求めていることがわかる。

一方、教育界側の状況を確認する。串本剛（2011）の報告によると、大学側が習得を重視する項目として、「学科の専門分野に特有の知識の習得」（85.1%）、「学科の専門分野に特有の考え方・ものの見方」（80.1%）、「学科の専門分野に特有の技能・技術」（72.8%）と高い数値となり、「対人的能力（リーダーシップ等）の向上」（64.3%）、「認知的能力（課題解決能力等）の向上」（56.2%）は低い数値となっている[11)]。これらのことからも教育界側ではいかに汎用的能力であるジェネリックスキルの修得を軽視していたかがわかる。

また、これらの調査結果の報告と重なる2011年度に大学設置基準の改正があり、「大学における社会的・職業的自立に関する指導等（キャリアガイダンス）」、つまり大学での就業力の育成が義務化された[12)]。これを期に、人材育成に向けた産業界と大学の連携が始まり、企業側のインターンシップの受け入れや大学での企業幹部・実務担当者による講義などが積極的に行われるようになった。

３．ジェネリックスキルの測定

平成29年度入学のビジネス社会学科１年生を対象とし、ジェネリックスキルを客観的な視点から測定するためのPROGと主観的な視点から測定するための在校生アンケートを実施し、結果を分析した。

PROGと在校生アンケートはそれぞれのアクティブラーニングを行う前後で実施している。それぞれのアクティブラーニングを通して、ジェネリックスキルがどのくらい向上しているか、またどのようなジェネリックスキルに変化があったのかを分析した。

（１）PROGによる測定

PROG（Progress Report on Skills）とは、学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同開発したジェネリックスキルの成長を分析するアセスメントプログラムで、社会で求められる汎用的な能力・態度・志向を測定することができる。具体的には、知識を活用して課題を解決する力である「リテラシー[13)]」と経験を積むことで身に付けた行動特性である「コンピテンシー[14)]」の２つの観点からジェネリックスキルを測定し、自身の現状を客観的に把握していく。本研究では、アクティブラーニングによってどのくらいのジェネリックスキルを向上させることができるのかを分析するため、「コンピテンシー」の部分を使用して分析を行った。コンピテンシーは「周囲の環境と良い関係を築く力」で、経験を振り返り、意識して行動することでより育成される力となっている。学生には、PROGによる診断結果が出たあとに、振り返りをさせている[15)]。自分では意識していないジェネリックスキルの修得を数値によって可視化することで、ジェネリックスキルの修得を実感させ、自分が修得したジェネリックスキルと不足するジェネリックスキルを意識しながら、次のアクティブラーニングを行わせた。具体的なコンピテンシーの能力は「対課題基礎力」や「対人基礎力」、「対自己基礎力」の３つに分解され、またそれぞれの能力の中により細分化された３つの能力を測定することができるものとなっている。

表１　PROGにおけるコンピテンシーの能力

対課題基礎力	課題発見力
	計画立案力
	実践力
対人基礎力	親和力
	協働力
	統率力
対自己基礎力	感情抑制力
	自信創出力
	行動持続力

出所）学校法人河合塾HPから抜粋し、筆者加工

（2）在校生アンケートによる測定

ジェネリックスキルの向上を測定するものとして、在校生アンケートも行った[16)]。PROGによる診断はあくまで客観的な視点からジェネリックスキルを判断するもので、潜在意識の中にあるジェネリックスキルを可視化しようとするものである。一方、在校生アンケートは、アクティブラーニングを行うことで、自分自身のどのような能力が伸びたと意識しているかを調査した。具体的には、「自身が向上したと思う能力は何か」という質問を設定し、5段階尺度で回答させている。

表２　自身が向上したと思う能力

1	豊かな教養・幅広い教養が身についた
2	専門分野や学科の知識・技能が身についた
3	知的好奇心や問題意識を持つようになった
4	コミュニケーション能力が養われた
5	ものごとや自分で主体的に判断できるようになった
6	責任感のある行動がとれるようになった
7	文章表現の力が身についた
8	自ら学ぼうとする意欲が身についた
9	生活の自己管理力が身についた
10	社会人としてのマナー・常識が身についた
11	協調性・チームワークが身についた
12	将来役に立つ知識や能力が身についた

5	4	3	2	1
とてもそう思う	そう思う	どちらともいえない	あまり思わない	思わない

出所）目白大学短期大学部「在校生アンケート」より抜粋

Ⅳ.アクティブラーニングとジェネリックスキルの関係

ここでは、アクティブラーニングを行った学生がジェネリックスキルにどのような変化があったのかをPROGによる測定と在校生アンケートの結果に分けて考察する。

１．PROGによる測定結果

表３は、平成29年６月と平成30年１月に実施したPROGの測定結果で、アクティブラーニングを積極的に行った学生と一般学生とのジェネリックスキルの数値を比較したものである[17)]。数値がプラスの場合は、アクティブラーニングを積極的に行った学生が一般学生よりも高いスコアになったことを表し、数値がマイナスの場合は、アクティブラーニングを積極的に行った学生よりも一般学生が高いスコアになったことを意味する。

入学当初と平成29年12月のアクティブラーニング実施後では、ジェネリックスキル総合点はマイナスとなっているため、アクティブラーニングを積極的に行った学生よりも一般学生の

表３　平成29年６月と平成30年１月の測定比較

AL学生と一般学生の比較		総合点	3つの力			9つの要素								
						対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
			対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情抑制力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
H29／６月		-0.07	0.04	-0.45	0.26	-0.04	0.42	0.31	-0.53	-0.82	0.21	0.82	0.24	0.45
H30／１月		-0.25	0.02	-0.65	-0.52	0.08	-0.08	0.67	-0.91	-0.71	-0.68	0.52	-0.86	-0.67
AL学生	H29／６月 H30／１月		0.40	-0.20	-0.60	0.00	0.20	0.60	-0.20	0.00	-0.60	-0.60	-0.80	-1.00

出所）著者作成

方が高い数値となっていることがわかる。詳細をみると、対人基礎力は、入学当初と平成29年12月のアクティブラーニング後ともにアクティブラーニングを積極的に行った学生の数値が高くなっている。つまり他者と積極的に関わることをいとわない学生がこの授業を履修していることがわかる。しかし、対課題基礎力について、入学当初はアクティブラーニングを積極的に行った学生の方が高い数値になっていたが、平成29年12月のアクティブラーニグ後では、数値が逆転し、一般学生の方が高い数値となった。これはアクティブラーニング後の振り返りで、「外部組織と関わりながらプロジェクトを実施していくことに充実感を持ちながらも、プロジェクトを目標としたゴールまで到達させていくことの難しさを実感した」という学生のコメントがあり、アクティブラーニングを行ったことで、改めて学生自身が対自己基礎力や課題基礎力が不足していることを実感したと考えられる[18)]。

３つの力をさらに細分化した９つの要素についても考察する。対人基礎力の中の３つの要素では、親和力と統率力の数値が上昇した。常にチームで活動するためチームワークやリーダーシップの能力を育成できたことがわかる。しかし協働力の数値が低下している。これは他者と活動する中で親和力は修得できても、仲間と協働し結果を出していく難しさを感じていたと考えられる。次に対自己基礎力について考察する。対自己基礎力の中の３つの要素がアクティブラーニングを行った結果、全てマイナスの数値となった。通常授業のように、１時限１コマと区切って勉強するのではなく、プロジェクトのゴールまで常にチームで考え行動し、他者とかかわりを持って物事を解決していくことの難しさを感じていたと考えられる。上述のプロジェクト後の学生の振り返りでも、「外部企業と交渉し、チームで考え決断していくことが一番大変なことであった」と述べている。そのことが、そのまま数値として表れていると考えられる。つぎに対課題基礎力について考察する。対課題基礎力の中の３つの要素もアクティブラーニングを行った後の方が低い数値となった。これもやはり、次々と表れてくる問題や課

題に対してどのように対応していくのかをチームで考え、決断し、順序だてて解決していくことの難しさを実感していたと考えられる。

表３の下段はアクティブラーニングを積極的に行った学生の平成29年６月と平成30年１月を比較したものである[19)]。上述のアクティブラーニングを積極的に行った学生と一般学生の比較と同じく、アクティブラーニングを積極的に行うことでジェネリックスキルの数値が低くなるという結果となった。アクティブラーニングは、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法である。講義形式の教育に慣れた学生にとってみると、課題解決型のアクティブラーニングは答えのない問題を解いていくようなもので、活動していくことに苦労していたと考えられる。

表４は平成29年６月と平成30年１月、平成30年７月に実施したPROGの測定結果である。

平成30年７月に実施したプロジェクト後の数値では、ジェネリックスキル総合点で一般学生よりもアクティブラーニングを積極的に行った学生の数値が高くなった。また、３つの力では、対自己基礎力はアクティブラーニングを積極的に行った学生よりも一般学生の方が高い数値となっているが、対人基礎力と対課題基礎力については、アクティブラーニングを積極的に行った学生の方が一般学生よりも高い数値になった。９つの要素を見てみると、平成30年１月の段階では、９つの要素の中で６要素がマイナスの数値となっていたが、平成30年７月の段階では９つの要素の中で２つの要素だけがマイナスの数値となり、ジェネリックスキルの向上が顕著であったことがわかる。平成30年１月の段階では、対自己基礎力の中の３要素が全てマイナスとなっており、アクティブラーニングを行っていくうえで、自己の感情をコントロールしながら、自信を持って、持続的に行動していく難しさを感じていた。しかし、平成

表４　平成29年6月と平成30年1月、平成30年7月の測定比較

AL学生と一般学生の比較		総合点	3つの力			9つの要素								
						対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
			対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情抑制力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
H29／６月		-0.07	0.04	-0.45	0.26	-0.04	0.42	0.31	-0.53	-0.82	0.21	0.82	0.24	0.45
H30／１月		-0.25	0.02	-0.65	-0.52	0.08	-0.08	0.67	-0.91	-0.71	-0.68	0.52	-0.86	-0.67
H30／７月		0.02	0.43	-0.30	0.35	0.10	0.63	0.67	-0.62	-0.35	0.31	0.75	0.32	0.41
AL学生	H29／６月 H30／１月		0.40	-0.20	-0.60	0.00	0.20	0.60	-0.20	0.00	-0.60	-0.60	-0.80	-1.00
	H30／１月 H30／７月		0.40	-0.10	1.21	0.22	0.25	0.47	-0.30	0.11	-0.45	0.60	0.12	0.31

出所）著者作成

30年７月の段階では、その要素のマイナスの数値も徐々に改善し、対自己基礎力を少しずつ修得してきていると考えることができる。他の要素を見てみると対課題基礎力の中の３つの要素の数値が大きく上昇している。アクティブラーニングを反復することで、課題発見力や計画立案力、実践力が徐々に修得できてきたと考える。また、表４下段のアクティブラーニングを積極的に行った学生の時系列の変化であるが、平成29年６月と平成30年１月よりも平成30年１月と平成30年７月の比較のほうがマイナスの数値が減少している。この数値からもアクティブラーニングを反復して行うことでジェネリックスキルの向上を行っていくことができると考える。

２．在校生アンケートによる調査結果

表５は在校生アンケートで「自信が向上したと思う能力」についての結果をまとめたものである[20)]。平成29年12月のプロジェクト実施後の時点で一般学生に比べてアクティブラーニングを積極的に行った学生の方が全ての項目で高い数値となった。特に、アクティブラーニングの活動に影響を与える「問題意識」（0.71）、「主体的判断」（0.68）、「責任感」（0.53）、「文章表現」（0.96）、「自己管理能力」（0.57）、「協調性」（0.60）、「将来必要な能力」（0.63）で高い数値を示している。

表６は平成30年７月に実施した２回目のアクティブラーニングの直後に行ったアンケート結果である。平成30年４月に行ったアンケート結果よりもさらに高い数値となっている。特に、「教養」、「コミュニケーション」、「主体的判断」、「責任感」、「文章表現」、「マナー」の数値が0.2以上の上昇となっている。

これらの在校生アンケートは、あくまで本人の主観で述べたものであるが、学生にとって見ると、アクティブラーニングを行ったことで、「主体的判断」や「問題意識」、「責任感」、「協

表５　自身が向上したと思う能力

AL学生と一般学生の比較	教養	専門知識	問題意識	コミュニケーション	主体的判断	責任感
	0.20	0.21	0.71	0.29	0.68	0.53
	文章表現	主体的学び	自己管理力	マナー	協調性	将来の能力
	0.96	0.29	0.57	0.01	0.60	0.63

出所）目白大学短期大学部「在校生アンケート（平成30年４月実施）」の結果より抜粋

表６　自身が向上したと思う能力

AL学生と一般学生の比較	教養	専門知識	問題意識	コミュニケーション	主体的判断	責任感
	0.60	0.21	0.71	0.50	0.89	0.76
	文章表現	主体的学び	自己管理力	マナー	協調性	将来の能力
	1.17	0.52	0.57	0.22	0.61	0.45

出所）目白大学短期大学部「在校生アンケート（平成30年７月実施）」の結果より抜粋

調性」などの汎用的能力、つまりジェネリックスキルを主観的に修得できたと感じていることがわかる。

Ⅴ.おわりに

本研究では、アクティブラーニングを反復して行うことで、知識基盤社会で必要とされる汎用的能力、つまりジェネリックスキルをどのくらい向上させることができるかを検証した。

ジェネリックスキルの向上を測定するために、客観的な視点から測定するPROGと主観的な視点から測定する在校生アンケートを実施した。

平成30年 1 月のPROGによる調査では、アクティブラーニングを積極的に行った学生が一般学生よりもジェネリックスキルが向上していることを示すことができなかった。これは、学生が短大入学後、初めてアクティブラーニングを行ったため、知識を生かして活動することの難しさや他者と協働しながら問題解決し、ミッションを達成していくことの難しさを実感した結果と考える。また、平成30年 1 月に実施したPROGが12月に行ったアクティブラーニングの直後だったこともあり、アクティブラーニングの効果をまだ学生自身が実感しきれていなかった可能性もある。しかし、平成30年 7 月のイベント後はアクティブラーニングを積極的に行った学生の方が高い数値となっている。アクティブラーニングを反復して実施することで、徐々にジェネリックスキルの修得を実感し、体感してきていると考えられる。

一方、在校生アンケートでは、平成29年12月と平成30年 7 月のイベントともに、一般学生よりもアクティブラーニングを積極的に行った学生の数値の方が高くなった。

これらのことからも、アクティブラーニングに参加したことが学生自身のジェネリックスキル向上に影響を与えていることは明確であると考えられる。しかし、アクティブラーニングを行うことで、ジェネリックスキルに影響を与えるには時間がかかると考える。在校生アンケートの結果から、アクティブラーニングの実施直後から学生自身が主観的、短期的な視点でジェネリックスキルが向上したことを感じているが、PROGではその効果を確認することができなかった。ジェネリックスキルを学生自身の中に定着させていくためには、アクティブラーニングを反復していくことが必要であると考える。

今回の研究では、ジェネリックスキルの向上要因をアクティブラーニングにのみ限定し考察を行った。しかし、実際には学生は学校行事やインターンシップ、サークル活動、アルバイトなど学生生活の中のさまざまな活動を通して、ジェネリックスキルが向上していると考えられる。今後は、ジェネリックスキル向上に影響を与える要因をより広げて分析して行きたい。

【注】

1）本学ビジネス社会学科は 5 つのフィールドを持ち、学生は 5 つのフィールドから 2 つのフィールドを選び、履修科目を選択している。
2）西武信用金庫の地域産業応援資金制度は、地域の中小企業などと産学連携を行う大学などを対象に、地域産業の発展・活性化のための活動資金の一部を助成する制度である。
3）2012年 8 月中央教育審議会答申
4）本学が修得を目指す「 3 つの力」は、経済産業省の「社会人基礎力」や中央教育審議会の「学士力」をベースに、本学の教育の方針を学生の学生にもわかりやすく説明したものである。
5）梅照院（ばいしょういん）は、東京都中野区にある真言宗豊山派の寺院である。一般には新井薬師（あらいやくし）として知られている。
6）「ブルーベリーぱん」という名称にした理由は、顧客の誰もが何を販売しているのかが分かるようにしたいとの学生の考えで決定した。
7）ロイスダールは東京都中野区に本社がある地元で有名な洋菓子の菓子製造小売業である。
8）フィンエアー（Finnair）はフィンランド航空ともいわれ、フィンランドのフラッグ・キャリアである。
9）Kawaijuku Guideline 2011年11月号　P53-57
10）「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート」
https://www.keidanren.or.jp/policy/2011/005honbun.pdf
11）日本高等教育学会における「全国の大学の学科長に対する、習得を重視する項目についてのアンケート調査」
12）この改正によって、就職相談窓口の充実（キャリアカウンセラーの配置など）、女子学生等を対象にした「ライフプランニング支援」の推進、大学における職業指導（キャリアガイダンス）の制度化が行われた。
13）元々は「書き言葉を読んだり書いたりできる能力」を意味していたが、現在では「特定の分野で用いられている記述体系を理解・整理し、活用する能力」として用いられている。
14）コンピテンシーとは、ボヤティズが「組織の置かれた環境と職務上の要請を埋め合わせる行動に結びつく個人特性としてのキャパシティ、あるいは、強く要請された結果をもたらすもの」と定義している。
15）1 つのアクティブラーニングが終了した後に、参加者全員で振り返りシートを記入し、良かった点や反省点をディスカッションしている。このディスカッションによって、アクティブラーニングに参加した学生の考えを共有させ、次回のアクティブラーニングに活用するようにしている。
16）在校生アンケートは、全学的に行っているもので、入学直後と 2 年次の 4 月、そして卒業式に卒業生アンケートとして実施している。今回の研究では、この在校生アンケートを利用しつつ、それにプラスして、アクティブラーニング直後にアンケート調査を行っている。
17）PROGの検査は、筆者が担当するクラス全員に行い、それをアクティブラーニングに参加した学生としなかった学生に区分し、それぞれの項目の平均点を求めた。表に表記している数値は、それぞれの項目についてアクティブラーニングに参加した学生と参加しなかった学生の平均点の差を表している。
18）アクティブラーニング終了後に行われる振り返りシートには自由記載の欄があり、そこに感想を記入させている。
19）積極的にアクティブラーニングに取り組んだ学生が、アクティブラーニングの事前事後でジェネリックスキルの数値にどのような変化があるかを示したものである。
20）在校生アンケートもPROGによる検査と同様に筆者が担当するクラス全員に行い、それをアクティブラーニングに参加した学生としなかった学生に区分し、それぞれの項目の平均点を求めた。表に表記している数値は、それぞれの項目についてアクティブラーニングに参加した学生と参加しなかった学生の平均点の差を表している。

【参考文献】

川嶋太津夫「今、大学教育に求められるジェネリックスキル－社会に通用する力をいかに評価・育成するか」，Kawaijuku Guideline2011.11,2011
溝上慎一「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」，東信堂，2014
PROG白書プロジェクト「PROG白書2015　大学生15万人のジェネリックスキルを初公開」，学事出版，2014
畑野快・上垣友香里・高橋哲也「アクティブラーニングの経験は学修成果と関連するのか－ 3 年間の学士課程教育における両者の変化に着目して」，大学教育学会誌，2015
松下佳代「ディープアクティブラーニング」，勁草書房，2015
中井俊樹「アクティブラーニング（シリーズ大学の教授法）」，玉川大学出版部，2015
PROG白書プロジェクト「PROG白書2016　現代社会をタフに生き抜く新しい学力の育成と評価」，学事出版，2016
宮本淳・徳井美智代・山田邦彦・細川敏幸「授業経験の質の差異が学生の学習態度・能力の自己評価に与える影響：2012～2014年　学生調査の分析結果より」，高等教育ジャーナル，2016
亀倉正彦「失敗事例から学ぶ大学でのアクティブラーニング」，東信堂，2016
教育課程研究会「「アクティブ・ラーニング」を考える」，東洋館出版社，2016
小山英樹、峯下隆志、鈴木建生「この一冊でわかる！アクディブラーニング」，PHP出版，2016
竹澤伸一「再発見　本物のアクティブラーニング」，文芸社，2018
小針誠「アクティブラーニング学校教育の理想と現実」，講談社現代新書，2018